

「砧蒔絵硯箱」(東京国立博物館蔵)の意匠について

— 15世紀の歌絵意匠の展開 —

きむら まみ
木村 真美 (学習院大学)

発表要旨

11
時
20
分
—
12
時

松ヶ崎・西キャンパス内センターホール

15世紀に制作された「砧蒔絵硯箱」(東京国立博物館蔵)は、長方形に隅切、面取がされた被せ蓋造りであり、総体黒漆にややまばらに金粉を蒔いた地蒔きの上に、高蒔絵や平文などの技術を駆使して秋の夜の景物が表されている。蓋表には、秋草と枕が近接して表され、満月が輝くという図様で、旅人の存在を暗示する留守文様の意匠である。一方蓋裏は、上部に里家で砧を打つ男女の様、下部に秋草と兎二羽が遠景で表されている。なお兎は見込みにも見られる。さらに蓋表の秋草や岩に「しられぬる」の葦手文字が隠されており、蓋表裏の図様と併せ、これが『千載和歌集』342番・藤原俊成の「ころもうつ音をきくにぞしられぬる里とほからぬ草枕とは」に取材した歌絵であることが明らかにされている。砧の音を放つ里と音をきく旅人を分節し、かつ蓋の表裏で両者の距離の近さを示す図様構成は、日々の生活を離れた旅人の寂寥感をしみじみと伝えてやまない。

しかし、その図様を詳細に見るならば、先の和歌とは直接に関係しないモチーフがあることに気付く。たとえば、枕の側面にくつきりと描き出される<猯>は、どのような意味を付与しているのだろうか。また、砧打ちの図様は「伊勢新名所絵歌合」岡本里を想起させるが、後者では砧を打つのは女性二人である。砧打ちは本来、女性の仕事とされており、俊成の和歌の元となった擣衣の漢詩も、女性たちの怨閨詩の一つであった。さらに、蓋裏および見込みに表された兎も、俊成の和歌とは有意の関係を見出せないモチーフである。このような図様の引用、新たな文脈の介入、定型的なイメージからの乖離や揺れなどから、「砧蒔絵硯箱」の意匠は単一のイメージに収斂していくものではないことが考えられる。

発表者は、秋野、枕、砧というモチーフから、藤原俊成の和歌の他に、謡曲「砧」も本作の意匠の取材元となっていると考える。謡曲「砧」は、夫を待つ妻の寂しさを砧の音に託した物語であり、女性の寂しさと旅人の孤独が相まって、秋の夜は一段と寂寥感を増すのである。「砧蒔絵硯箱」を手にした当時の享受者は、和歌や謡曲によって引き出されるしみじみとした情緒を味わい、かつ当時流行した悪夢を払う辟邪の猯模様の枕が運び込む当世好みや、吉祥を象徴する兎にも目を向け、それら個々のモチーフを寄り合いとして、あたかも連歌を詠むかのように、イメージの連鎖や破調を楽しんだのではないだろうか。

各モチーフが特定の和歌や謡曲の情景を構成しているように見えながら、それぞれのモチーフが様々な参照系の存在を示し、イメージの分節と再編が輻輳する本作の意匠に、発表者は室町時代に流行した連歌の発想が組み込まれていた可能性を提示したい。